

# 在日コリアンの祭りにおける多文化共生空間の創成

——京都「東九条マダン」の楽器隊を事例に

片岡 千代子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程2年

## 1. はじめに

本調査では、在日コリアン<sup>1)</sup>を中心的主体とした祭り・イベント（以下、在日および在日の祭り）「東九条マダン」における朝鮮の伝統楽器の演奏、プンムルノリ（以下、プンムル）<sup>2)</sup>の担い手について注目する。プンムルは「東九条マダン」の演目のなかでも民族文化表象を代表するパフォーマンスである。しかしながらその担い手達については、祭りの企画運営を担う「東九条マダン実行委員会」（以下、実行委員会）においても大雑把にしか把握されていない。本調査の第一の目的はプンムルの練習の参加状況や参加者の属性等を記録することにある。それにより在日の祭りを事例にした、多文化共生社会の実現につながる多文化共生空間創成のあり方についての今後の論考の足がかりとしたい。

「東九条マダン」は1993年、京都市最大の在日集住地域の東九条で、「京都でも民族祭りを」というひとりの在日2世の熱い思いをもとに発足した〔2007年で第15回〕。「民族」「在日」のみならず「地域」「共生」をテーマに掲げ、そこには発足当初から多くの日本人が関わってきた。10年余りの歩みのなかで「民族」「在日」といった言葉のみでは捉えきれないような独自の形が作り上げられ、現在では特に外部から「多文化共生の祭り」といった意味付与がなされることも多い。

近年、「多文化共生」や「人権」といった言説の一般化にみられるように、異なる文化や価値観の接触、相互理解、共働、共生のあり方が、官民を問わず、様々な分野・レベルで議論、試行されている。同質性を前提とした共働というよりも、異質性を前提としたその可能性が模索され始めたといえる。ただ、民族、世代、職業・階層、障害の有無等、異なる文化・価値観をうみだす背景も様々である。人々を集団へと結びつけるものが同質性や共通性に大きく拠るとするならば、異質性を前提とした共働というのは、そう簡単に実現されるものではない。このようなことがことさ

らに主張されること自体、共生や他者理解の困難な現状を示している。

だからこそ、「在日と日本人が共に主体的に参加する祭り」を目指し、10年以上にわたり継続してきた「東九条マダン」について丹念にみていくことはそれなりに意味がある作業であろう。「東九条マダン」という祭り作りを通して、そこには少なくとも、異民族間の共働が模作され実践されてきた事実があるからだ。では、それはいかなる形で、いかなる人々によってなされてきたのだろうか。それらの問いを解く1つの糸口として、プンムルの演奏の担い手に着目したいと調査者は考えたのである。

## 2. 調査対象および方法

プンムルを担うのは「プンムル班」および「プンムル隊」である。「プンムル班」は実行委員会の下部組織の1つで、その「プンムル班」が主宰する練習の場への参加者で構成されるのが「プンムル隊」である。「プンムル隊」は当日出演を目的に毎年随時結成される。練習の実施にあたっては、主に前年度参加者に郵送案内がなされるほか、口コミ、祭り宣伝用のポスター・ビラ、地域全戸に配布するフリーペーパー等によって、広く祭り「外部」に向けて参加が呼びかけられる。大人の部と子供の部があり、練習は双方、9月第1週から当日直前の10月の最終週まで週1回、計10回ほどである。子供の部は地域の福祉施設とそこに隣接する公園、大人の部は地域の公立中学校の体育館を借りておこなわれる。近年、子供の部は40名ほど、大人の部は60名ほどの参加がある。練習のさい使用する楽器<sup>3)</sup>と当日の衣装パザ・チョゴリは、基本的には実行委員会側、つまり「プンムル班」が無料で貸し出しをおこなっている。参加にかかる費用は無料である。また事前申し込み制でもなければ、予め連絡を入れる必要もない。動きやすい服装さえして練習会場に向けば、いつでも誰でも参加できる仕組みになっている。

本調査では、第14回（2006年度）の大人の部の参加者に対し、1）年代、性別、職業、現住所、生まれ育った所、2）国籍、民族的なものに対する意識、3）参加のきっかけ、動機、楽器の経験等についてアンケート調査を実施した<sup>4)</sup>。併せて4）参加動態を調べた。アンケートは、各参加者、今年度の初回参加時に直接手渡し、記入を依頼、できるだけその日のうちに回収するようにした。実施にあたり、1回目の練習時、「プンムル班」メンバーの全体に対する事務連絡の合間に、調査者自身が今回のアンケートの説明と協力依頼をおこなった。第1回時の参加者にはその場で配布し、2回目以降に初めて参加する者に対しては、個々にアンケートの説明をしたうえで記入をお願いした。参加動態については、「例年、毎回の出欠はとっていない」「出欠確認の協力は実質的に難しい」という「プンムル班」のやり方に準じ、調査者自身で参加者名簿を作成し、固体識別をできるよう努め、毎回1人ひとりに対し参加の有無を確認した。

### 3. 「東九条マダン」概要

「東九条マダン」は毎年11月の第1週の休日、地域の公立学校のグラウンドを一日中開放して実施される。会場は地域の4つの公立学校を年毎にまわっていく形式をとっている。来場者は毎年4000人強である。当日は朝、白いパチ・チョゴリ姿の隊が地域をパレード、パレード隊が会場に到着した時点で開幕。会場中央にゴザを敷いて設えた円形状の舞台上、地域の保育園園児達によるクス玉わり、民族学校の舞踊、「マダン劇」、ゲスト歌手のライブ、「プンムル」、「サムルノリ&和太鼓」といった10以上の演目が、夕方まで次々と披露される。最後は、朝鮮の伝統楽器や朝鮮の民謡が鳴り響くなか、会場に居合わせた人々が一体になって踊り、祭りは終了する。

第1回から「地域」「共生」というテーマを象徴するかのようになり、和太鼓や地域の公立中学校の吹奏楽部の演奏、車いすを使った演目が採用された。以後、市内同和地区の芸能、沖縄の伝統芸能等、「在日」「朝鮮文化」以外の演目が毎回登場した。しかしながら、恒例演目化したなかでも目玉の出し物といえば、プンムルあるいはサムル（ノリ）<sup>5)</sup>と呼ばれる朝鮮の伝統楽器の演奏である。

ここで簡略に実行委員会について紹介しておこう。実行委員会は例年、7月初旬に結成され、12月初旬に一旦解散される。これは当日開催に関する討議、お

よび決議の場である。他方、事務的作業や渉外を担う事務局があり、これは通年存在している。実行委員会の下部組織と位置づけられる班活動には「プンムル班」のほか、「美術班」「マダン劇班」といったものがある。11月の当日を迎えるまで、事務局の会議が月に1回以上、実行委員会の会議が月1回か2回行われ、その動きと並行して各班単位での活動が自律的に展開される。近年は常時、事務局に約10名、実行委員会に約40名、当日スタッフに約160名が参加している。また参加の形態には2通りある。「団体参加」——民族団体構成員、外国人教育に携わる教職員グループの一員等の立場での参加——と、「個人参加」——個人的に祭りにアクセスしての参加——がある。なお当日開催を含めた祭りの企画運営は、基本的にカンパ、ボランティアで成立している。

### 4. 「プンムル隊」および「プンムル班」の活動

プンムル隊を主宰する「プンムル班」は、実行委員会が結成される前、6月頃から活動を開始、その年の練習の計画、班内での役割分担等を話し合い、貸し出す楽器や衣装の確認を順次おこなう。また「プンムル班」は当日、来場者を対象にした「楽器体験コーナー」も担当する。

毎年、10回ほどの練習で当日1つの作品が演奏できるように計画されているという意味では、練習の進め方や楽譜の構成はある程度定型化されている。とはいえ、「より充実したマダンにするために」試行錯誤は惜しむことなく繰り返される。回毎に参加者も参加者のレベルも異なることから、その都度、従来のやり方が練り直される。例えば、今年度は、全10回の練習のうち5回目にはレベル毎に小グループに分けての練習が試みられた。会議に参加できなかった場合の情報の共有や、意見交換を円滑にすることを目的にメーリングリストが設けられた。

第14回時の「プンムル班」正式メンバーは9名、準メンバーが6名である。準メンバーとは、今年度は正式メンバーではないもの適宜助っ人として関わる、実質的には「プンムル班」といって差し支えない者達である。ただ以下の調査報告では、準メンバー6名のうち、大人の部で指導を担うことのある者2名のみ、「プンムル班」に含めた<sup>6)</sup>。「プンムル班」の内訳は、実行委員会の参加団体の1つ、在日文化運動団体「ハンマダン」のメンバーでもある者が8名、過去に「プンムル隊」へ参加したことがきっかけに「プンムル

班」として「声をかけられた」者が3名である。

「プンムル隊」の練習は午後7時から8時半までおこなわれ、9時には会場の中学校校門を施錠する。初回日[2006年9月4日火曜]には午後6時すぎから会場の体育館へ、ワゴン車3台に分け、楽器の搬入がおこなわれた。参考に第3回[2006年9月26日火曜]の流れをみていこう。午後6時45分頃、どこからともなくぼつりぼつりと人が現れはじめ、開始5分前ともなれば30名弱が集まる。午後7時少し前に練習開始。まず班のメンバーT氏の指揮でストレッチ、その後チャンゴの紐の付け方を復習し、チャンゴかプクのどちらか各自好きな楽器を練習。約10分の休憩後、後半は参加者全体での練習。全体練習の傍らで別に、リーダー楽器であるケンガリの練習がおこなわれたり、その日初めて参加した数人に対し適宜指導がおこなわれたりした。また練習の途中から遅れて参加する者が10名弱、8時過ぎに駆けつける者もあった。見学者も2名いた。この日は午後8時10分に練習は終了、当日の宣伝活動の一環として来週予定されている「プレ・ベイント」に関する事務連絡があり、9時には解散した。練習後、何人か連れ立って居酒屋にいく姿もみられた。

参加者は、その年の参加の初回時に「プンムル班」が用意した用紙に名前・住所・連絡先を記入する。必ずしも毎回全員が練習に参加する訳ではないという暗黙の前提があるなかで、主宰者側は雨天時等の事務連絡の手段は確保しておく必要がある。ただ2回目以降の参加については出欠をとられる訳でもなく、名乗りや記名を要求される訳でもない。当日直前に衣装貸し出しのための用紙の提出があるのみである。参加者同士は、顔は知っていても名前は知らないという場合が多い。指導的立場の「プンムル班」メンバーでさえ、必ずしも参加者の個体識別ができていないとはいえないようだ。また練習には1回参加しただけで当日出演する者、反対に当日参加できないのが予め分かっているながらも練習には参加する者もあった。

「プンムル隊」の練習は、特定の人物が技術習得を目的に大勢の生徒に対し教えるといった、俗にいう「教室」の雰囲気はあまりない。指導は、皆で楽器を叩く合間に適宜個人的におこなわれることが多い。途中参加でも初心者でも、適宜個人的にフォローを受けることで、全体の練習に気兼ねなく楽しく参加できるように配慮がなされている。当日出演を目的にしているとはいえ、1つの場に数十人が集まって一緒に楽器を叩くという行為そのものを「楽しもう」といった雰

囲気が基調になっている。そしてその場を計画、提供し、必要に応じて指導をおこなうのが「プンムル班」といえる。教則本があるわけではない。朝鮮の伝統楽器のいわれや仕組み等の説明も一切ない。さすがに当日前ともなると、出演人数を確認しつつ作品としての仕上げを意識した練習が進められるが、基本的には極めて、参加者各々のスケジュール、レベルに合わせたかたちで練習が進められている。そういったあり方は「プンムル班」メンバーの練習に関する語りにもみて取れる。

「教えることが目的だけど、個人攻撃は一切しない。早いですよー、のレベル。で、最終的に、みんなで一緒にやりましょう、というのが東九条マダンのプンムル隊」[O氏]

「東九条マダンのすごくいい所は初めて来た人でもすぐ叩ける、練習そんなに行かんでもある程度できるところ。毎回行かなあかんかって、1回でも休んだら東九条マダンに出れへん、みたいなものやったら、やっぱりしんどいなと思って。その人のレベルに合わせて、なおかつ練習少なくともいける、みたいなもんを目指したい」[T氏]

「東九条マダンのプンムルっていうのは、楽しかったらいいと思うねん。すごい楽しいっていうのが周りにも広まるんじゃないか、と思ってる。なかには(技術のレベルに関して)こんなんで(祭り当日に)出ていいんですか? とか聞いてきゃはる人がいるねんけど、何で? って思う。何か受け身な感じっていうか。皆で作っていくのが東九条マダンやと思ってるし。こっちにしたら、教える側と教えられる側、っていうの(意識)あまり持ってない。……中略……これは雨の音を表してます、とかいう(楽器の)説明、そういうなのは後で言ってもいいんちゃうかなって。先にイメージが入るやん? もっと自由にやってもらって、聞いてもらう方がいいような気が、個人的にはすんねん」[H氏]

では続いてアンケートの結果をみていこう。

## 5. 「プンムル班」および「プンムル隊」の参加者

第14回当日「大人プンムル」の参加者は76名である。「プンムル班」10名、「プンムル隊」63名(祭り事務局の参加者で名簿には無記入の4名を含む)のほか、班メンバーT氏の知人3人が当日飛び入り参加した。なお、今年度「プンムル隊」の名簿に記名した者

表1 性別

	人数（うち、プンムル班）	%
男性	26(6)	46.4
女性	30(4)	53.6
	56(10)	100

表3 職業

	人数（うち、プンムル班）	%
社会人・フリーター	38(9)	67.9
	保育士7(1)	
	公務員3(1)	
	教員2(0)	
	プログラマー1(1)	
	自営1(0)	
	営業1(0)	
	新聞社1(0)	
	医療1(0)	
学生	16(1)	28.6
	大学院2(0)	
その他	2(0)	3.6
	H団体長1(0)	
	小学校補佐1(0)	
	56(10)	100

注) 内訳の表記は記入されたままのものを使用。ただ韓国系民族団体の委員長のみ「H団体」に変更。

は63名だったが、うち4名は当日不参加だった。アンケートは「プンムル班」を含め計70枚配布、うち56枚回収した。

### 5-1. 年代、性別、職業、現住地

まず性別〈表1〉は男女半々、年代〈表2〉は10代後半から50代まで幅広いが、中心は20代、30代である。それに対応するように、職業〈表3〉は社会人・フリーター、学生が多い〈表3〉。なかでも職種を回答した者に保育士が6名いるが、これは発足当初から実行委員会に団体として参加する地域の保育園の職員である。参加者の現住地〈表4〉をみてみると、約半数が南区以外の京都市内である。南区以外の市内、市外、府外を含めると80%にのぼる。ほとんどが東九条や南区といった「地元」以外の者で占められている。一方、東九条在住者8名で、5分の1にも満たない。ただ8名のうち6名が「プンムル班」で、そのうち4名は生まれ育ちも東九条の者である。ここには、指導者（「プンムル班」）＝地域の者、それ以外の参加者（「プンムル隊」）＝地域外という傾向が読み取れる。

表2 年代

	人数（うち、プンムル班）	%
10代	6(0)	10.7
20代	23(2)	41.1
30代	17(7)	30.4
40代	5(1)	8.9
50代	5(0)	8.9
	56(10)	100.0

表4 現住地

	人数（うち、プンムル班）	%
東九条	8(6)	14.3
南区	3(0)	5.4
市内	29(3)	51.8
市外	8(0)	14.3
府外	8(1)	14.3
	大阪3(1)	
	滋賀2(0)	
	奈良2(0)	
	兵庫1(0)	
		100

### 5-2. 国籍・民族的なものに対する意識

参加者を国籍別に分けると〈表5〉のようになる。韓国籍が19名、朝鮮籍が2名、両方を合わせても21名<sup>7)</sup>で、半数に満たない。半数以上の34名が日本国籍者である。しかしながら、近年毎年1万人前後の韓国籍ないし朝鮮籍者が日本国籍を取得しているなか、日本国籍者が必ずしも「日本人」という民族的意識をもつとはいえない状況がある。つまり国籍と民族的意識の不一致が当然のこととして存在するのである。その点をおさえ、民族的なものに対する意識〈表6〉をみると、「日本人」という民族的意識をもつ者（日本国籍日本人）を含め）は18名、30%強しかいないことが理解されよう。ここでいう民族的なものに対する意識とは、あくまでも、私が何者であるかという感覚、つまりアイデンティティであり、他者が私を何者としてみているかという感覚、つまりポジショナリティとは区別される<sup>8)</sup>。そこで日本国籍でありつつも「日本人」としなかった者の内訳〈表7〉をみると、「ダブル」「在日」あるいは「地球人」と回答した者が複数名いる。特に前者の2つには朝鮮半島にルーツがあるという意味が表明されている。さらに日本国籍で「日本人」とはしなかった者計15名のうち、6名が「プンムル班」である点は注目すべきであろう。また〈表6〉によると、朝鮮半島にルーツがあるとする者が回答したであろう「韓国」、「朝鮮」、「韓国・朝鮮」は3つを合わせても6名である。他方「在日」と回答した

表5 国籍

	人数 (うち, プンムル班)	%
韓国	19(2)	34
朝鮮	2(1)	3
日本	34(7)	61
無回答	1(0)	2
	56(10)	100

表6 民族的なものに対する意識

	人数 (うち, プンムル班)	%
韓国	1(0)	1.8
朝鮮	3(0)	5.4
韓国・朝鮮	2(0)	3.6
在日	12(5)	21.4
日本	18(1)	32.1
その他	14(4)	25
	ダブル2(1)	10.7
	韓国系日本人1(0)	
	在日朝鮮人3(0)	
	在日コリアン1(0)	
	在日韓国人1(0)	
	日本で生きる韓国籍の人間1(0)	
	地球人2(1)	
	関西人1(1)	
	四通打ち人1(0)	
	日本籍日本1(0)	
	特に設定しない1(1)	
無回答	6(0)	
	56(10)	100

表7 日本籍で「日本人」としなかった者の内訳

	人数 (うち, プンムル班)
ダブル	2(1)
韓国・朝鮮	1(0)
在日	3(2)
地球人	2(1)
関西人	1(1)
設定しない	1(1)
四通打ち人	1(0)
無回答	4(0)
	15(6)

注) 表6「その他」の「日本籍日本」は含めず。

者が12名あることから、国籍名ないし国家名に対応しない独自の民族的意識をもつ者が結構多い点が指摘できる。そのことは「その他」に自由記述された回答により顕著に示される。「ダブル」、「在日朝鮮人」<sup>9)</sup>、「韓国系日本人」、「日本で生きる韓国籍の人間」等、なかには「特に設定しない」といった回答もあった。ちなみに日本国籍で「日本人」とした者のなかにも、「特に設定しない」に通じる、いわば固定的な印象を与えがちな民族的意識そのものに一旦留保を示すよう

な回答をした者が若干名みられた。

### 5-3. 参加のきっかけ・動機・回数

次の参加のきっかけ〈表8〉、参加動機〈表9〉については、回答は自由記述にしたものの一定の傾向がみられたためカテゴリー化し集計した。参加のきっかけが「団体・職場を通じて」の者が40%強を占める。また「毎年出ているから」「スタッフだから」といった、きっかけをあえて意識するまでもなく、参加が日常生活化、年中行事化していると捉えられる回答も12名いた。それには「プンムル班」5名が含まれている。だがそのような定着化がみられる一方で、「一般客として来て」「祭り広告・ピラをみて」といった、いわば「外部」に向け広範におこなわれる宣伝活動等を契機にした参加は極めて少ない。見ず知らずの者がちょっとした好奇心で参加する場合は少なそうである。実際に参加しているのは、知人・友人なり具体的な、あるいはその延長線上の人間関係に連なる者達や、従来から参加者を送り出してきた職場・団体等に属している者達が大半である。すなわち、「誰でも」参加できる仕組みにはなっているものの、「プンムル隊」は、既存の、内向的な関係性を基盤に成り立っているのである。

参加動機〈表9〉にも「当事者性への言及」が30%弱みられた。最も回答率が高そうな「民族文化への言及」も30%弱であった。その回答には「プンムルが好きだから」「楽しいから」「興味があるから」といったものが多く、「民族文化と向き合うため」「アイデンティティを確認するため」といった従来の文化運動にありがちな動機は表面的にはほとんど見受けられなかった。また「みんな」「出会い」「仲間」といった言葉を用い「共同性への言及」をした者が若干名あった。

表8 参加のきっかけ

	人数(うち, プンムル班)	%
当事者性への言及 「毎年出ているから」 「スタッフだから」 「生活だから」等	12(5)	21.4
団体・職場を通じて	24(1)	42.9
知人・友人を通じて	5(0)	8.9
一般客として来て	1(0)	1.8
祭りの広告・ピラをみて	1(0)	1.8
実行委員会からの案内	4(0)	7.1
調査目的	1(0)	1.8
無回答	8(4)	14.3
	56(10)	100

表9 参加の動機

	人数(うち、プンムル班)	%
当事者性への言及 「毎年参加しているから」「スタッフだから」等	15(3)	26.8
共同性への言及 「皆との出会い」「大切な仲間と過ごす時間」等	3(3)	5.4
民族文化への言及 「韓国朝鮮の文化に興味があった」「チャンゴをしたかった」等	15(2)	26.8
団体・職場を通じて	7(0)	12.5
その他	8(0)	14.3
誘われて、進められて	3(0)	5.4
「東九条マダンの活性化のため」	1(0)	1.8
他所で指導するため	1(0)	1.8
研究目的	1(0)	0.8
練習日時が自分に合うから	1(0)	1.8
息抜き	1(0)	1.8
無回答	9(3)	16.1

参加のきっかけや動機の回答で「当事者性への言及」が一定数みられたが、それを裏付けるように、これまで10回以上参加経験がある者が19名で、かなりの数にのぼる〈表10〉。一方で初めての参加も結構多い。参加回数で楽器の技術レベルは判断しかねるが、あらゆる参加頻度の者が一緒に練習している様子が見えがえる。

表10 参加回数

回数	人数(うち、プンムル班)	%
初めて	15(0)	26.8
2	8(0)	14.3
3	8(1)	14.3
4	1(1)	1.8
5	3(0)	5.4
6	2(0)	3.6
7	0(0)	0
8	0(0)	0
9	0(0)	0
10	4(1)	7.1
11	0(0)	0
12	2(1)	3.6
13	0(0)	0
14(初回から継続)	8(5)	14.3
無回答	5(1)	8.9
	56(10)	100

注) これまでに参加した回数の合計であって、開催年度とは必ずしも対応していない。例えば「2回目」のなかには、連続して参加した場合と、何年かぶりに参加した場合とが含まれる。

#### 5-4. 参加動態

参加者全員の正確な参加動態は把握しきれなかったため、ここでは全体的傾向をみる手がかりとして、各回の参加者総数と各回の初回参加者数〈表11〉、および「プンムル班」11名の参加動態〈表12〉を参考にする。

参加人数は毎回50人前後である。「プンムル班」11名で、名簿記入者数63名とすると計70名ほどが練習の場に訪れたことになるが、各回の練習は総参加人数の6、7割でおこなわれているといえる。初回参加時の人数をみてみると、1回目から参加する者が最も多い

表11 各会の参加者総数および初回参加者数

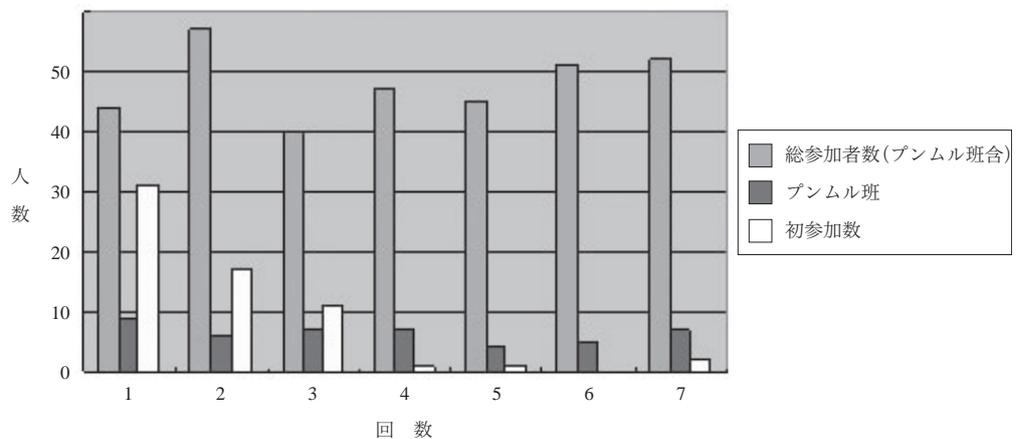


表12 「プンムル班」メンバーの参加動態

回数	K氏	H氏	Y氏	T氏	C氏	O氏	M氏	N氏	R氏	U氏	I氏	計
第1回2006年9月5日	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		10
第2回2006年9月12日	●	●	●	●			●		●	●		7
第3回2006年9月26日	●	●		●	●				●	●	●	7
第4回2006年10月3日	●	●	●	●	●				●	●		7
第5回2006年10月10日	●	●	●	●					●			5
第6回2006年10月17日	●		●	●	●				●	●		6
第7回2006年10月24日	●	●	●	●	●		●	●	●			8
第8回2006年10月31日	調査者不参加											
当日2006年11月3日	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
計	8	7	7	8	6	2	4	6	7	4	1	
性別	F	F	F	M	M	M	F	F	F	F	F	

とはいえ、2, 3, 4回目の練習時から参加する者も結構多い。ほぼ毎回新参加者がいる。他方「プンムル班」の場合、11名中2名が皆勤しているのをはじめ、毎回一定の人数が参加している。だが各々の参加動態〈表12〉をみると、指導的立場を担う「プンムル班」でさえ、参加状況にはばらつきがあるのがわかる。以上から練習の全日程に参加する者も一定数あるとはいえ、全体の参加状況としてはかなり流動的であるといえよう。

## 6. 考 察

### 6-1. 「プンムル」の場とは？

これまでの分析で明らかになったことは1つに参加者の多様性、複雑性、雑多性である。男女比率は半々、年齢層も幅広く、職業も多様である。国籍、民族的意識についていえば、日本籍で日本人の民族的意識をもつ者、一般にいう日本人が半数は参加している。他方、朝鮮半島にルーツをもつ者、一般にいう在日の参加者に、国民国家には対応しない独自の民族的意識をもつものが相当数いた点は注目に値する。「民族」という用語自体に懐疑的であり、一旦留保を示しているともとれる回答もあった。民族的意識に関する記述に各々のオリジナリティが表明されていた。そこでは日本人／在日といった二分法的な人間分節は無効に近い状態にあるといえる。

2つには参加の流動性である。この年は当日まで練習8回のほか各種イベントを含め、計11回「プンムル隊」として集合する機会があったが、参加状況にかなりばらつきがみられた。また一日の練習をみても時間設定は緩やかであった。参加者は各々のライフスタ

イルや意思に合わせて無理なく参加していたといえる。このような、パフォーマンス集団としては不安定ともいえる状態は、「プンムル班」および一定数のリピーターの参加によりフォローされていたと解釈できる。

以上の参加者に関する事柄は「プンムル班」の運営のあり方と鏡応関係にある。練習への参加および練習の場でのあり方は、極めて個人の自主性に委ねられていた。「叩きたい」という個人の感情、意思をできるだけ受け入れ活かそうとする配慮があった。事前申し込み制ではなく、練習に出向けば参加できるとする点はその最たる表れであろう。在日のなかには、日本社会で生活するうえで自らの出自を抑圧し「日本人化」を強制されてきた者も少なくはない。未だ自らの出自について複雑な感情を克服しえず日常生活を送る者もいるだろう。そのような参加者の潜在的な感情をできる限り汲み取るべく、参加に関する規制を緩やかにしているとも解釈できる。いわば「いつ／何回参加するか?」、あるいは「あなたは誰か?」、さらには「何人か?」といった諸々の事柄は留保したうえで、皆で一緒に楽器を叩くという行為だけに特化したあり方が「プンムル」の練習・参加の過程には指摘できる。

こういったあり方の背景を解く1つの糸口として「プンムル班」メンバーの構成に着目してみる。前述したように、日本籍で日本人という民族的意識をもたない者15名のうち6名が「プンムル班」である。なかには「ダブル」、民族的意識そのものを「設定しない」と回答した者もいた。またその6名のうち3名は発足当初から「プンムル」に関わっている人物である。いわば彼ら／彼女らは、(国)籍、民族的意識といった個人の主体を構成する諸要素が、年代や状況によって多分に揺らぎ、使い分けられ、また変化していくものであるということを実体験を通して肌身に感じてきた者たちだといえよう。だからこそ、彼ら／彼女らはそういった諸要素を「問わない」でいることの必要性を見出したのである。それゆえに、これまでみてきたようなあり方を選択し、個々の属性を「問わなくてよい」練習のあり方を作り出してきたのではないかと解釈できる。

### 6-2. 在日というマイノリティを主体とした文化運動として

ただここで忘れてはならないのは、当日、参加者は皆朝鮮の民族衣装、白いパヂ・チョゴリを着用するという点である。「プンムル隊」は多種多様な人々で構

成される。しかし参加者は、祭り当日の非日常的空間においては朝鮮民族文化のパフォーマンスを担うひとりとして登場する訳である。その光景をみて、祭りの内部事情のことを知らない「外部」の人々は「プンムル」の担い手は皆在日だと錯覚する場合も多々あると聞く。また、日本人が大半を占める観衆から違和感を指摘する声はほとんどないとはいうものの、男性の着衣であるパヂ・チョゴリを、女性を含め全員が着用している状態は、厳密には「本来」的ではないということもできる。しかしながら、「東九条マダン」の「プンムル」は、その担い手や着衣について「民族的な意味での厳密さ」を追及はしていない。これらの要素については、大らかに構えている。だがしかし一方では、表出される朝鮮文化としての「それらしさ」は決して譲っていない。換言すれば、「東九条マダン」における「プンムル」は、朝鮮文化の擬似的な代弁装置として機能しているといえる。

そして楽器や当日衣装パヂ・チョゴリは主宰者側が無料で貸し出している点にも留意しておく必要がある。一般的には楽器や民族衣装をもたない場合が多いとすると、このような物理的な条件整備は少しでも気軽に「民族文化」に触れるため戦略として極めて重要である。このように「プンムル隊」の場合のように、より「外部」に開かれているはずの領域において、主宰者側からいわば一方的に参加の場なり道具なりを提供するという構図がある。そこに、在日/日本、マイノリティ/マジョリティという非対称的な関係性をみてとることもできる。「東九条マダン」が本来的にはマイノリティの文化運動であることの表われとして解釈することも可能であろう。祭り集団における各種位相と財源の問題、および民族的な祭り・イベントと自主財源でおこなわれる近年のその他の祭り・イベントとの類似点や相違点については改めて論じる必要があるだろう。

また日本籍で日本人としての意識をもつ者、一般にいう日本人が「プンムル」を何の戸惑いや躊躇もなくできる訳ではないこともうかがえる。いわば朝鮮の伝統楽器との距離感や構えといったものが依然確固として存在する。それは主宰者側の開放的な姿勢とは一見対照的である。しかしながらその距離感を縮める可能性がこの「プンムル」の練習の場にはあるという事実を提示しておく。以下はアンケートの自由記入欄の回答である。

「最初は日本人である自分が韓国の楽器を叩く意味について悩んだけれど、C氏の「楽しかったらええ

ねん」の一言で吹っ切れて、楽しんで関われるようになった。マダンへの関わり方を理論的にとらえるんじゃなくて、まず体感して人とふれあって、そこで感じるものが1番大切というか」

「初めてプンムルに参加した年は朝鮮半島の民族楽器を叩いている自分にとっても違和感がありました。今は東九条マダンがあるからこそ経験できるものだと思います。何より楽しいです」

「プンムル」の場の特徴でもある、同一空間における直接的で身体的な相互作用というものが、「距離感」を縮めるものとして重要であることがここに示唆されている。

## 7. おわりに

「東九条マダン」は、在日を中心的主体とした祭りであるが、その代表的演目、「プンムル」を担うのは在日でもあり、日本人でもある。あるいは、民族と文化を一对一对応でとらえようとする既存の支配的な考え方については、一旦留保しようとする人々でもある。より正確には、在日/日本人といった二分法的な人間分節ではとらえきれないような、複雑で多様なアイデンティティをもった人々が多数参加している。参加者の社会的属性も様々である。また楽器のレベルや参加頻度も多様である。そのような多様な参加者に開かれた場がプンムルの練習の場であり、それは「そこでの関わりを通しさらにその流動性と非・決定の可能性が増大するような空間」[平田2005]といえる。

本調査で現在の担い手についての概略は明らかになったが、以下の点について今後さらに記述、考察することが必要であろう。発足当初から現在に至る「プンムル隊」の参加者の変化<sup>10)</sup>、多様な参加者を受け入れるさいの問題点や障壁にいかに対処し乗り越えてきたか、練習や参加における直接的な相互作用および異民族間関係の構築、個人の価値体系への祭りの取り込みといった事柄である。今回得られた参加者の情報を手がかりに、個人的なインタビューをおこなうなどして、考察を深めたい。

### 注

1) 本稿では在日を、「朝鮮半島に何らかの形で出自があるという自己意識をもつ人々」の意味合いで用いる。つまり、朝鮮籍・韓国籍者だけではなく、かつて朝鮮籍・韓国籍であり後に日本国籍を取得したものや、朝鮮籍・韓国籍者と日本国籍者の間に生まれた子供やその子孫までも含めることにする。2004年末の外国人登録者数は197万人を超え、国籍数は

183カ国を数える。そのうち韓国・朝鮮籍者は約60万人、登録外国人の約30.8%であり、永住資格者すなわち戦前日者とその子孫は約46万人である (<http://www.moj.go.jp/main.html> 法務省 2006年1月15日)。また元韓国・朝鮮籍からの帰化者は1952年から2003年のあいだで約27万人に及び、1990年代後半以降は毎年1万人前後が日本国籍を取得している ([http://www.mindan.org/min/min\\_reki.php](http://www.mindan.org/min/min_reki.php) 在日本大韓国民団中央本部)。

2) プンムル(風物と記す)とは朝鮮半島の代表的な民俗芸能で、現在は一般に朝鮮の伝統楽器の演奏を意味する。農楽とも呼ばれる。プンムルは、村落共同体の集団意識の高揚、維持、育成に活用されてきた。楽・舞踊・演劇を含んだ総合芸術であるが、中でも音楽の比重が大きい。楽器の種類は、クエンガリ(鉦)、チン(銅鑼)、チャンゴ(筒型の腰のくびれた太鼓)、プク(円形の平たい太鼓)、ソゴ(でんでん太鼓)、ナルナリ(チャルメラ)等である。「東九条マダン」の大人プンムルでは8割がチャンゴかプクを用い、ナルナリやチンがリードするケースが多い。子供の部ではソゴが用いられる。

また演奏形態により「プンムル」と「サムルノリ」に分かれる。「プンムル」は集団で歩き周りながら演奏し、「サムルノリ」はサムル(4つ)の楽器、クエンガリ、チン、チャンゴ、プクを用いて座ったままで演奏する。一般に「サムルノリ」の方が、難易度が高く演奏に一定の技術が必要とされる。

3) 2006年現在、「プンムル隊」として使用可能な楽器(チャンゴ・プク)は、計112台である。このうちの使用可能なものは子供用サイズが25台である。大人の部で使用可能なものはチャンゴ43台、プク41台、計84台である。凡そ100人規模の「プンムル」が可能である。合計112台のうち、「東九条マダン」実行委員会の所有のものが71、ほかに実行委員会参加団体の1つで在日文化運動団体「ハンマダン」所有の41である。

4) 本調査で使用したアンケートには厳密に言えば2通りの用紙がある点を断っておく(後付の資料を参照のこと)。1回目の練習時アンケート調査を実施した翌日、参加者のひとりからクレームが入った。それを受け改訂した用紙による回答と、改訂前の用紙による回答とを一緒に集計したという意味である。2回目の練習時に改訂版を配布した訳であるが、そのさい全員に改訂版への記入は要求しなかった。その理由は1つに、改訂にあたり質問内容や量は変更していないということ、また本調査の目的は、厳密な社会調査法に則った統計処理というよりは、参加者の全体的傾向の把握や今後実施する個人的聞き取りのための基礎情報の入手といったことに重点をおくものであると判断したためである。もっとも、参加者に再三手間をとらせる訳にはいかないとの思いもあった。

これらの経緯について少し長くなるが記しておく。クレームは第1回配布後にひとりの日本人女性から事務局宛にメールで入った。「(名前、年齢、国籍を尋ねることに対し)初対面の人にこれはあまりにも無神経なアンケートではないか。個人情報や安易に入手しようとしている。実施において事務局で確認をとったかどうか?」との旨である。もちろん、「答えたくない場合は答えなくてもよい」とアンケートには記した。ただ実際、実施にあたり実行委員長と事務局の統括責任者、および「プンムル班」メンバーには許可を得たが、事務局会議での承諾は得ていなかった。クレーム後、調査者は事務局の中心的なメンバー数人にアドバイスを受けながら、アンケートの質問内容はそのまま設問の順序や仕方を訂正、調査者の個人情報も記載し、アンケート用紙を新たに作成した。そして2回目の練習時には参加者全体に対し、前

回配布したアンケート用紙は設問が不用意で誤解を与えないものであったことを詫言ううえで、改訂版を前回に回答済みの者(つまり1回目の練習に参加した者)も含めて全員に配布した。ただ前述したように、基本的に再回答の必要はなく、改訂版の方に記入したいという場合のみ改めて記入してもらうよう説明した。そして改訂版を提出した者には、前回回答済みの用紙を個別に封筒に入れ返却するという処置をとった。

ちなみにこのクレームに関わるやりとりの過程で、事務局や「プンムル班」メンバーにおいて、祭りとアンケートや調査者との関係性に対し、大きく2つの見解がみられたことは注目に値する。その1つはアンケートや調査者を祭り「内部」の人間として位置づけ表明することによって参加者にアンケートの協力を依頼するというもの、もう一方は調査者のおこなうアンケートと事務局や「プンムル班」は基本的に無関係であるという立場をとることによって、アンケートの遂行を見守るという考えである。前者は、クレームがあったことは調査者個人の責任であると同時にそれを容認した祭り担い手側の責任であるゆえ、事務局として慎重に対応しなければならないとの態度がみられた。一方後者は、そもそも調査者のアンケートに直接、事務局や「プンムル班」は関係している訳ではないから、特に注意すべき点がないのなら調査者の自己責任でアンケート実施を容認するという態度であった。実際は、前者の人々の協力のもと改訂版を作成し、調査を継続するに至った。また本アンケート結果は、調査者自身の学術的な報告書のみならず、調査結果の還元として、今年度の祭り報告書にも何らかの報告文を書くことになった。

このような一連のやりとりは、祭りの作り手として長年参加しかつその参加は調査を目的にするという、調査者自身の立場のあいまいさと全く無関係とはいえないだろう。もし、これまで祭りに何の関係もなくいきなり調査目的で訪れた者ならば、アンケートの設問内容・仕方について、事務局会議でもっと厳しい議論がされたり取り決めが生じたりしたと思われる。そもそも参加者個人を対象としたアンケートが容認されたかどうかとも疑わしい。一方、調査者自身も「内部」の参加者として長年関わってきた経緯やそれによって培われた担い手達との関係性に甘んじ、クレームの当事者が指摘したような個人情報の入手という点に関して楽観的に構えていた節は否めない。ただ、一旦頓挫しかけたともいえる調査が曲りなりにも遂行されたのは、調査者が、祭りの「外部」の人間でもあるが「内部」の人間でもあるという、その立場における両義性に拠るところもあるのではないだろうか。また、クレームの当事者が在日ではなく日本人であるという点も興味深い。なぜなら調査者自身、もしクレームがあろうものならそれは「在日の複雑な立場や心情に鈍感な日本人」といった脈絡で、在日側から発せられるのではないだろうか懸念していたからでもある。以上のような調査に対するクレームおよびその対応のあり方は、フィールドと調査・調査者の関係について考えるにあたり示唆に富む事実であり、別個に考察する必要があるだろう。

5) サムル(ノリ)は、第4回以降は演目上「サムルノリ&和太鼓」となったが、発足当初から主に「ハンマダン」という民族文化運動団体のメンバー7、8名が担っている。この団体は「東九条マダン」実行委員会に参加する団体のなかでも、役割分担上、参加濃度や頻度が高い団体である。

6) ただ、「プンムル班」メンバーのなかで今年度は1回も練習には参加しなかったI氏にはアンケートを配布できなかったため、後述のアンケート集計は10名分でおこなった。また

体調の都合上、途中から練習の参加を辞退したメンバーが1名いた。以上の点は後述〈表12〉を参照されたい。

- 7) 「朝鮮籍」は、朝鮮民主主義人民共和国の国籍の意味ではなく、出身地域名称を示す、あくまでも便宜上のものである。一方「韓国籍」は韓国政府が発行する国籍証明書の提示にもとづくものであり、大韓民国の国籍を示すものである。

なお、一般在日の人々の国籍分布は韓国籍が約7割、朝鮮籍が3割であるとされている。この状況は周知のとおり日本が協定永住権の付与というかたちで韓国籍の保持者を優遇する法的措置をとったことを反映しており、在日の人々の自主的な選択の結果を表すものではない〔小川1992〕。

- 8) ただアイデンティティとポジショナリティは密接な関係性にある。それゆえ今回のようなアンケート調査により得られた情報は、今後個人的な聞き取りをしたさいには異なってくる可能性も大きいといえる。
- 9) 現在最も広範に流布されている「在日韓国・朝鮮人」の呼称は、南北の分断された状況が無自覚に追認するものだという批判がある。他方、分断以前の統一された状況、民族の総称を意図するものとして「在日朝鮮人」の呼称が好まれる場合も多々ある。ただ「在日朝鮮人」は「朝鮮」籍の人のみを

表しているという誤解を生じかねない、あるいは「日本人」側がかつて無自覚に侮蔑的に用いていたために現在でも差別的なニュアンスが残存しているといった指摘もある〔宮内2005〕。

- 10) 「プンムル班」関係者によれば、発足当初から現在までの名簿が全部時系列にそって残されている訳ではないという。したがって参加者の変遷を浮き彫りにするのは難しいと現時点では思われる。

#### 参考文献

- 小川伸彦 2003 「親族会メンバーの社会属性的分析」塩原勉編『平成2・3年科学研究補助金研究成果報告書 宗教行動と社会的ネットワーク』143-356.
- 坪井善明・長谷川岳 2002 『YOSAKOI ソーラン祭りと地域活性』岩波書店.
- 平田由美 2005 「非・決定のアイデンティティ——鷺沢萌『ケナリも花、サクラも花』の解説を書き直す」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, 167-798.
- 宮内洋 2005 『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房.

資料 アンケート（それぞれ質問項目のみ抜粋）

アンケートその1 〈1回目練習時に配布したもの〉

- 年齢
- 性別
- 所属を以下から選び、よろしければ、学生の方は学年を、社会人の方は職種をお答えください。  
中学校 高等学校 大学・大学院 専門学校 社会人・フリーター その他
- 現在、どこにお住まいですか？  
東九条 南区（東九条以外） 京都市内（南区以外） 京都市外 京都府外（ ）
- 出身はどこですか？  
東九条 南区（東九条以外） 京都市内（南区以外） 京都市外 京都府外（ ）
- 国籍を教えてください。  
韓国籍・朝鮮籍 日本国籍 その他（ ）
- 民族的なアイデンティティ（国籍にかかわらず、「私は日本人です」「私は朝鮮人です」といった、民族にかかわる自らの意識）をあえて設定するなら、今現在、それは以下のうちどれが一番相応しいと思われますか？  
韓国・朝鮮 「在日」 日本 その他（ ）
- これまでプンムル隊練習に参加されたことはありますか？  
a. 今回（今年度）初めて b. ある（ ）回目  
bの方への質問。何年度に参加されたのか覚えておられる限りでお答えください。
- 今回参加されたきっかけは何ですか？（例：職場の友人を通じて、所属する団体を通じて、前回「東九条マダン」に参加して、HPをみて……）。
- 今回プンムル教室に参加された動機は？（例：毎年参加しているから、民族楽器をしたいから……）
- 楽器の体験を教えてください。（例：今回初めて、サークルで5年ほどやっている……）
- お名前

アンケートその2 〈2回目の練習時以降に配布したもの〉

- ①過去の「東九条マダン」において、プンムル隊練習に参加されたことはありますか？  
1. 今回初めて 2. ある  
2に回答された方→第何回に参加されたのか覚えておられる限りでお答えください。  
(参考：第1回は1993年，第5回1997年，第10回2002年，第13回2005年)
- ②今回プンムル隊練習のことはどのようにお知りになりましたか？
- ③今回プンムル隊に参加しようと思われた動機は？
- ④楽器の経験をお教えてください。  
④-1. 朝鮮半島の民族楽器の経験を教えてください。  
1. 今回初めて 2. 「東九条マダン」プンムル隊で経験がある  
(経験があるものすべてに○をつけてください→チャンゴ・プク・ソゴ)  
3. 「東九条マダン」プンムル隊以外でも経験がある。(どんなところで→ )  
④-2. 朝鮮半島の民族楽器以外の楽器の経験があればお教えてください。
- 以下は、やや立ち入った質問となっていますが、よろしければ是非ご協力ください。
- ⑤あなたが自分に一番ふさわしいと感じておられる民族的なアイデンティティ（「私は○○人」「私は○○」などの意識）を言葉で表現するなら、どのようになりますでしょうか？  
私は、( )
- ⑥現在の、学校・お仕事など（○をつけてください）。  
1. 中学校 2. 高等学校 3. 大学・大学院 4. 専門学校  
5. 社会人・フリーター（できれば職種をお教えてください→ ） 6. その他（ ）
- ⑦年齢 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代 7. 70代以上
- ⑧性別 1. 男性 2. 女性
- ⑨籍 1. 韓国 2. 朝鮮 3. 日本 4. その他（ ）
- ⑩現在のお住まい  
1. 東九条 2. 南区（東九条以外） 3. 京都市内（南区以外） 4. 京都市外 5. 京都府外（ ）
- ⑪育った場所  
1. 東九条 2. 南区（東九条以外） 3. 京都市内（南区以外） 4. 京都市外 5. 京都府外（ ）
- ⑫あなたにとって、「東九条マダン」のプンムルとは、どんな存在でしょうか？ ご自由にお書きください。書ききれない場合は裏をお使いください